富山県射水市（新湊地区）
放生津に関わる古地名調査メモ
町名の由来

「神保長誠」像（じんぼながのぶ）:本覚寺蔵）

射水市立放生津小学校総合授業資料
2023年（令和5年）01月15日　作成（改訂版 06）
桧物和広　　Kazuhiro　Himono

目　　次

1.まえがき
2.地名
①放生津　p－3
②法土寺町　p－6
③四十物町　p－7
④紺屋町　p－8
⑤立町・南立町・西立町・菊屋町・江柱・獅子絵田町　p－9
⑥三日曽根町・四日曽根町・善光寺町・長徳寺町　p－13
⑦六渡寺町　p－14
⑧山王町　p－15
⑨中町　p－16
⑩奈呉町　p－16
⑪東町・天神町　p－17
⑫古新町　p－19
⑬新町　p－19
⑭荒屋町・倉屋敷町　p－20
⑮放生津城・二の丸・二の丸本町 ・神保寺町　p－21
⑯奈呉の浦　p－24

令和5年01月15日／改訂

放生津古地名

放生津に関わる古地名調査メモ

1.まえがき（放生津の特徴）

低湿地帯（ていしっちたい）の中央に放生津潟があり、庄川の乱流（らんりゅう）と放生津潟に注ぐ「鍛冶川（かじがわ）・下条川（げじょうがわ）は所々に微高地（びこうち）をを形成し、海岸線には約5mに達する砂丘がある。庄川河口と放生津潟を結ぶ内川は、古くから「湊」として利用されてきました。

低湿地帯（ていしっちたい）／地面が低く、水の流れがない場所。
乱流（らんりゅう／まっすぐな流れではないこと。／微高地（びこうち）／少し高い地。

低湿地帯のほとんどが水田に利用され、縦横（じゅうおう）に水路が通り船による交通路ともなっていた。

新湊町（放生津地区）は、1871年（明治4年）に成立し、2005年（平成17年）合併し射水市となった。

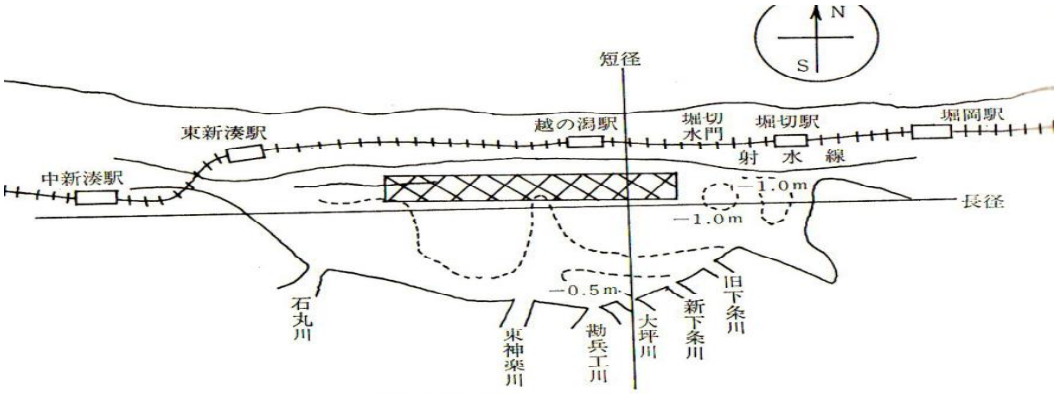
内川は、庄川右岸の河口部に位置し、新湊市街地を東西に流れる、流路2.5kmの二級河川で上牧野川、牧野川、前田川、田町川、大石川、西神楽川などの6つの準用河川を持ちます。

かつて、内川は、放生津潟をへて「奈呉の浦、庄川」に流れていたことから、水量・流速とも豊かな河川でした。

二の丸川、石丸川、東神楽川、、下条川などの東側に位置する川もあり、この地域は「川ばかり」と言ってもいいのです。

しかし、1967年（昭和42年）より着工された乾田化（かんでんか）事業により、排水路は分断され支川流量は、極端に減少し上流域に位置する放生津潟が富山新港として、1968年（昭和43年）に整備されたのに伴い、流水は直接日本海へ排出されるようになり、内川及び支川の流れはほとんどなくなりました。 乾田化（かんでんか）／水を調節出来る田にすること。

放生津潟に注ぐ川（参考図）



二級河川で上牧野川、牧野川、前田川、田町川、大石川、西神楽川へ、内川へ庄川の水を導入していますし、内川浄化排水機場としても「西内川」へ庄川の水を導水されています。

（1992年／平成4年～1997年／平成9年）

つまり、2箇所より「一級河川庄川」の流水を内川への導水調整（どうすい）して、内川の水をきれいにしているのです。（1981年（昭和56年）5月1日開始）

国土交通省内川流域浄化揚水機場

内川流域浄化揚水機場取水樋管

富山県内川浄化排水機場（西内川）

2. 地名

(1) 放生津

放生津八幡宮「放生会」(ほうじょうえ)に由来する地名。

天平18年(746年)大伴家持(やかもち)が越中国司として赴任する奈呉の浦(想像図)

「放生会」(ほうじょうえ)とは、捕獲(ほかく)した魚や鳥や魚を野に放し、殺生(せっしょう)を戒める宗教儀式であり仏語(ぶつご)であります。

仏教の戒律(かいりつ)である「殺生戒」を元とし、日本では神仏習合(しんぶつしゅうごう)によって神道にも取り入れられた儀式です。

神仏習合(しんぶつしゅうごう)/:仏も神も同じ扱い
戒律(かいりつ)/宗教用語で修行する者の生活規律

①放生津八幡宮

大伴宿禰家持卿(おおとものすくねやかもち)が、746年(天平18年)越中国守(こくしゅ:越中の長官)として、赴任し「豊前国宇佐八幡大神」(大分県宇佐市)を勧請され「奈呉八幡」と称したのが始まりとされている。

宿禰:すくね:武人や行政官を表す称号/卿:きょう/高位の官職

創建以来現在まで、続けて「放生会」(ほうじょうえ)が営まれてきたと伝えられています。

{放生会」は、鳥や魚を放ち、生類供養(しょうるいくよう)を行う神事とされます。

古来より、人間は、鳥や魚を生きる糧として食べてきました。

日本人は、生きとし生けるものはすべて神様の命を授かって、生きていると考えました。鳥や魚にも神様の御霊が宿っています。

この地域は、古くから漁業・農業で栄えた地域です。放流された魚が、川や海で殖えて豊かな恵みとなって帰ってきてほしいという願いが込められているのかもしれません。

当宮文書には、嘉暦3（かりゃく）年(1328)に、奈呉の地名を放生津に改めたという記事があります。当宮の「放生会が放生津の地名の由来」になったと考えられています。

放生会は、10月2日の例大祭に合わせて行われています。神様の恵みに感謝し、放生の舞が奉納（ほうのう）されます。そして、式の終盤で鳥が大空に放たれます。魚は、式後に内川に放流されます。

放生津は、江戸期における加賀藩河北七浦の一つとして、北前船が出入りする商港、さらに時代をさかのぼる時代より越中有数の港町として栄えた「放生津湊」に始まります。

「放生津の名」は今も、「奈呉の浦」に面した町名として残されています。

1772年～1780年（安永年間）に記された「町年寄:松屋（泉田家）の文書（松屋文書）にも、八幡宮について、「大伴家持」が宇佐八幡神（うさはちまんしん）を勧請（かんじょう）したことと、729年～749年（天平年間）より連綿（れんめん）と「放生会」が営まれてきたことや、「八幡宮の放生会」が放生津の地名になったこと等が記載されています。1312年（嘉暦3年）に地名が改められたと
あります。

勧請（かんじょう）／ 離れた場所にいる神や仏に対して、こちらへ来てくれるように祈り願うこと。

放生津城を築いたのは、正応3年（1290）に守護職として越中国に赴任した、「名越時有（なごえときあり）」である。

「名越時有は北条氏－名越流・公貞（きみさだ）の子」。祖父の名越公時は弓馬や蹴鞠にも習熟し、まり奉行（けまり）をつとめている。北陸道は北条氏の勢力が強く、時有は、「太平記（たいへいき）が語る、鎌倉幕府の滅亡の5日前、放生津城（奈呉城）での「名越時有（なごえときあり）一族滅
亡」を伝える哀史（あいし:悲しい出来事をつづった物語）が残されている。

北条氏－名越流・公貞（きみさだ）／北条公貞と名越公貞同一人物。

1493年には、「明応の政変」「（めいおうのせいへん）」で幽閉された10代将軍「足利義材」を越中守護代である「神保長誠」（じんぼう ながのぶ）が助け出し、放生津を御座所（ござしょ）とし「越中公方（くぼう:将軍）」とした。

放生津に小幕府が出現し、「足利義材」（あしかがよしき）を慕って都から公家・武家が集まり、都の文化が花開いた放生津であった。

1563年（永禄6年）越中平定を目指す「上杉謙信」を放生津で迎え撃ち、一戦を交えた「神保長衡」（じんぼながひら）・椎名泰胤（しいな やすたね）らの武将と一向一揆勢と参戦し、敗北した。

この時、「放生津八幡宮」も焼失し、後に「神保氏」が再建した伝えられる。1576年（天正4年）守山城も平定した「上杉謙信」（うえすぎけんしん）が、放生津で「十楽の市」（とうらくのいち）（自由市）を開いたと伝えられています。数年後、1581年（天正9年）「神保長住」「（じんぼう ながずみ）」は、八幡宮領町に商業保護の制札をだしている。

この時、「神保長住」は、織田信長の家来になっていたが、やがて追放され、放生津城は、前田利長公（まえだとしながこう）の家来「山崎長鏡」「（やまざき ながのり）」の居城となる。

（放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌より）

②放生津湊

放生津の名は鎌倉期から見え、「奈呉の浦」の名はそれよりもはるかに古くから呼ばれていました。庄川の河口東岸に広がる放生津潟。所々に形成された微高地形（びこうちけい）と海岸線には約5mに達する砂丘があり、そこを伏木から東岩瀬に通じる浜街道が通り、その街道筋に沿って街村の形態をもつ港町が形成されました。

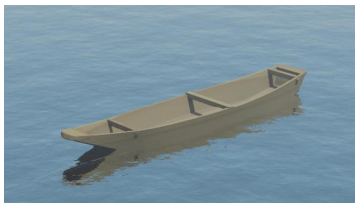
一方、放生津潟に接して広がる低湿地帯は水田に開発され、排水のために縦横に走る水路は「タズル舟・いくり舟」と呼ばれた舟運交通路が発達。それらを後背地にもつ湊である放生津は射水地方における政治経済の中心地として発展します。

現在の放生津小学校は、中世における「越中守護所（えっちゅうしゅごしょ）の跡地」と言われています。

越中守護所（えっちゅうしゅごしょ）／守護所（しゅごしょ）とは、中世日本において守護が居住した館の所在地のこと。守護の政治的権限の拡大とともに、政庁所在地としての機能が国の守りより移されていった。

藩政期（はんせいき）には高岡城の建築資材が、能登半島や内陸の五箇山からこの放生津を経由して運ばれました。東西に伸びる浜街道沿いに形成された「放生津町」の通称名は、東町・中町・奈呉町（西町とも）と称された。

農業などに使用された「いくり船」



また、四十物町と奈呉町の間だには、山王社にちなんで「山王町」が、「奈呉町」には恵比寿町（えびすまち）が生まれています。

これらの中心である「奈呉町・中町・山王町」が現在の放生津町であると共に、一部往時の通称名も残されています。

現在の港町付近は始め、「浜新町」（はましんまち）と呼ばれ、後に「放生津新町」の開町によって「古新町」と改称されます。

「港町」と「放生津町」は現在「湊橋」で結ばれていますが、初期には「渡し舟」が往来し、六渡寺の「大渡し」に対して「小渡し」と呼ばれていました。しかし江戸期に起きた大火によって多くの命が失われた為に、架橋が行われ、長く「お助け橋」と呼ばれていましたが、明治期に「湊橋」と改称され今に至ります。

江戸期には北前船（きたまえせん）が数多く出入りする「一大商港」として賑わった放生津ですが、明治に入って新たに導入が進んだ西洋型汽船は「北前船を廃業」へと追い込みます。さらに船舶の大型化に呼応して富山県は伏木港の近代化工事を行い、放生津は漁村へと追いやられ表舞台から姿を消しました。

しかし、工場の誘致によって臨海工業地帯化（りんかいこうぎょうちたい）が進むと、今度は伏木港がその限界に直面し、再び放生津潟の近代化計画がスタート。新湊市は再び富山県を代表する海の玄関口へと返り咲きます。

新湊の町並みは内川沿いの風景が知られていますが、残念ながら伝統的な古い家並みは残されていませんでした。かつて「長徳寺」と呼ばれた在郷町である現在の「本町」もまた同様で、メインである放生津町から八幡町にかけて旧浜街道沿いに、かろうじて往時を偲ばせる建物が点在して残されています。

(2)法土寺町

町名は、元の「法土寺村」からきており、放生津内川南辺の「二の丸地区」を含んだ地域で、「久々湊・石丸・放生津」の入会地字今堀に鎌倉時代（かまくらじだい）末期に栄えた。当時の「時宗」（じしゅう）の 放生津道場である「報土寺」に由来する。

「時宗」（じしゅう）／仏教の一つ宗派

中世期には、報土寺（のちの専念寺）・光正寺（石丸山）が領内にあり、放生津守護所（放生津城）も近かった。「村名名附帳」（前田家文書）によれば、対岸の「荒屋村」と共に「金屋村」（牧野）の枝村とあり、正保4年（1647年）前田家古絵図には、村高34石が記入されている。

1714年（正徳4年）に現在地（立町）へ移転し、享保（きょうほ）年間（1716年～）山王社（日吉神社）と曼荼羅寺との間に「七間町」が出来、現在の「法土寺町」の原型が出来たのです。

「時宗」（じしゅう）は、鎌倉時代末期に興った、日本仏教浄土教の一宗派である。開祖は「一遍上人」であり、鎌倉仏教の一つでもある。（総本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺:通称遊行寺）

「一遍上人」も真教上人も教団に所属している僧尼を「時衆」と呼んでおり、「時衆が時宗に変化」していったのです。

報土（ほうど）とは「浄土」（じょうど）を意味し、報身仏の住する世界。阿弥陀仏（あみだぶつ）の極楽浄土（ごくらくじょうど）もその一である。

仏語あり、「一切の煩悩（ぼんのう）やけがれ」を離れた、清浄（せいじょう）な国土。仏の住む世界。

特に、阿弥陀仏の住む極楽浄土である。浄土宗は法然によって開かれた仏教の一宗派であり、称名（しようみよう）念仏（南無阿弥陀仏と口に称える）によって，阿弥陀仏（あみだぶつ）の極楽浄土（ごくらくじょうど）へ往生（おうじょう）することを期す。

往生（おうじょう）／現世を去って仏の浄土に生まれること。

(1)踊り念仏と一遍上人「(いっぺんしょうにん)

踊り念仏の様子

『一遍聖絵』に「(いっぺんひじりえ)」よれば、1279年(弘安2年)一遍上人の一行が善光寺への遊行(ゆうぎょう)の際で長野県・佐久地方で踊り念仏を行なう姿が描かれています。

遊行(ゆうぎょう)／仏教の僧侶が布教や修行のために各地を巡り歩くこと。

そこに法衣(ほうい)に身を包んだ僧侶や武士たちが輪になり念仏を唱えながら踊る姿が描かれます。

これが一遍上人の一団が踊り念仏を行なった最初とされます。なかでも一遍上人を一躍有名にした「踊り念仏」がありました。

この「踊り念仏」が現在夏踊りとしての「のじた踊り」と考えられます。

当地域の開拓は、「時衆」(じしゅう)に負うところが大きく、放生津潟岸の設定や街道の改修なども教団の集団作業によったという(新湊市史)。かつて地内には、報土寺のほか光正寺(現本町2丁目)があった。

江戸の初期(1603年 - 1700年ごろに東橋が架けられた結果、東内川沿いの法土寺町の家並みが東に延び「法土寺出町」と呼ばれた。また、山王社(日吉社)の横を抜けた横通りは、「七間町」と呼ばれ、同町南辺には、三軒町の名もあった。(曼陀羅寺文書)

1792年(寛政4年)立町焼け、1810年(文化7年)法土寺焼け(曳山も焼失)があり、1845年(弘化2年)法土寺町を火元とする「放生津大火」により、放生津八幡宮・東町神明宮・勝光寺・光明寺・本誓地・光山寺などの他民家490余戸を焼失した。この後1866年(慶応2年)に「法土寺町愛宕社」が創建された。

(3)四十物町

魚を保存加工

1688年～1704年頃に古文書に四十物町と標記されている。

町名の由来は、海産物の加工製造等に従事する人が多かったことに由来する。

「あいもの」とは、魚の「生物」と「干物」の「間物:あいだの物」のものを意味する。全部で「四十種類」あったので「四十」と書いたとされる。また、乾物は年中(始終→四十)食べられることから「四十」と書いたともいう。

また、東町と山王町の間の町(あいだのまち)の由来を表現する話も伝わっている。

江戸時代の紺屋

(4)紺屋町

町名は、北の山王町から内川を隔てて「向い町」と呼ばれていた。(1624年寛永～1658年 明暦)室町末期1548年(天文17)頃に「紺屋座」があったことに由来する。

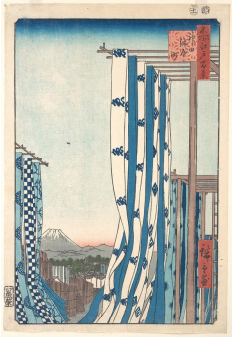
紺屋(こうや/こんや)とは江戸時代に染め物屋をさした言葉。もしくは、その店の主人を指す。「むらさき屋」とも言う。

「藍」とは、のれん、手ぬぐい、浴衣、風呂敷など、藍色の布製品に代表される。

これらはすべて、日本の暮らしに密着する、日本文化の一端です。サッカー日本代表のユニホームの「サムライブルー」も、ルーツは藍色。藍色は、日本の色といえるでしょう。藍染めの原料は、アイと名のつくさまざまな植物です。元々、世界各地に自生し、古来より多くの効能を持つ薬草として珍重されてきました。日本においても染めの原料としてだけでなく、肌に塗ったり、貼ったり、煎じて飲んだり、食べたり、人の暮らしに欠かせない大切な存在でした。」

日本では、「タデアイというタデ科の植物」から藍が作られている。藍染めは、古くから行われていたと思われるが、近世になって木綿が広がったことに伴って、全国で盛んにタデアイが栽培され、染められるようになった。江戸時代には、阿波の国(現在の徳島県)が最大の生産地であった。

江戸の紺屋町を描いた広重の浮世絵



もともと、「紺屋」は中世に「紺掻き」(こんかき)と言われた藍染(あいぞめ)専門の職人を呼んだものだが、非常に繁盛したため、江戸時代には藍染に限らず染物屋全般の代名詞となった。

「紺掻き」(こんかき)／藍で布を染めること。

日本中に点在していたが、1615年には大坂、1721年に江戸、1756年に京都で、それぞれ紺屋仲間が成立する。天保の改革のときには株仲間禁令(かぶなかまきんしれい)によって一旦、途絶えたが、1850年ごろの嘉永の再興令によって復活した。

株仲間禁令(かぶなかまきんしれい)／商品流通を独占してきた株仲間を否定し，仲間以外の一般商人に自由に売買を認めること。

絵心や色彩感覚が必要な職業からか、しばしば紺屋から著名な絵師を輩出した。代表的な絵師として、長谷川等伯(はせがわとうはく)、曾我蕭白、「(そがしょうはく)亜欧堂田善「(あおうどう でんぜん)、小田海僊「(おだ かいせん)、鈴木其一「(すずき きいつ、歌川国芳「(うたがわ くによし)、大橋翠石「(おおはし すいせき)などが挙げられる。

関西では「染物、洗い張り、湯のし」など一切を引き受ける職業を悉皆屋（しっかいや）と言い、染物屋は紺染屋、茶染屋、紅染屋と分業的な名称で呼んだ。両毛地方では藍染以外の染業者を「合雑紺屋」（あえまぜこんや）と俗称した。江戸時代の染色工は使用する染料の種類によって四つのグループに分かれた。

湯のし（ゆのし）／反物に蒸気を当てながら生地の巾を整えることを「湯のし」と言います。／洗い張り（あらいはり）／仕立てを解いてもう一度反物に戻して水で洗います。本来のツヤが戻ります。

特に染色（せんしょく）の困難な紫草を扱う紫師、冬季に染色を行う紅花を扱う紅師、矢車や橡（くぬぎ）などを扱い茶色系の多彩な中間色を染め上げる茶染師、長年の研鑽によってスクモ玉（藍玉」の発酵を調節しさまざまな布製品を染める藍を扱う紺屋である。

阿波（あわ）の栽培農家が夏に収穫した蓼藍（たであい）の葉を発酵させ乾燥させたスクモという原料を作る、これを搗き固めてボール状の塊である「藍玉」（あいだま）として海路で京坂や江戸へ運ぶ。　（阿波（あわ）／徳島県阿波市）

紺屋はこれを藍甕（あいがめ）に入れて「木灰、石灰、米ぬか」を加えてその上で水を加えて加熱することによって酵素を活発にし染料を作る。この一連の作業を「藍を建てる」という。

(5) 立町・南立町・西立町・菊屋町・江柱・獅子絵田町

(1) 町の由来

「立町」の町名は、南北に延びた町筋であることに由来する。（北陸浜街道に対して縦にある）

1684年（天和4年）から町名が記録されている。

1781年～1789年（天明年間）には、長朔寺（ちょうさくじ）の地子地（じしじ:土地を貸す））に「新規町」が出来、「地子新町」・「十銭町」・「西立町」・「菊屋町」が開かれた。

また、南にも広がり「南立町」が1862年（文久2年）に開かれた。西神楽川は、度々洪水を起こしていたので、流れを変えて内川へ流すことを願ったが、放生津周辺の村の反対で実現しなかった。

1861年（文久元年）の出水後ようやく西立町南端から直川（ちょくがわ）され、滞水地帯（たいすいちたい）は整地されて1875年（明治8年）東側を「江柱」とし西側を「獅子絵田」と呼んだ。

しかし、川を埋め立て整備されとはいえ、元々川の支線が多くあった江柱・獅子絵田地区は、地盤が低く、このような地名を付けたものと考えられます。

1875年（明治8年）に放生津大字「江柱」と命名（江柱連合自治会資料より）

江柱概観

藩政期の二百四十年間、放生津町は小杉の郡奉行所の支配をうけた。東西の磯づたいに長い町並から南へ伸びるために放生津橋（古橋、東橋、山王橋）が内川に架けられたのは慶長（一五九六～）の初めであった。この橋の南に堅に立町の家並が貞享（一六九四～）ころからみえる。田圃の中の（端の）長朔寺（天啓山）が立町の南に慶長十九年（一六一四）藩の大家老奥村栄明の妻女要泰院（亀子）の菩提所として守山にあった旧長慶寺を再興された。ここは、まだ空地が多く不便な藪沢の湿地であったが文久元年（一八七五）ころ西神楽川出水後の改修工事で川を直川に滞水地帯を整地して明治八年（一八七五）東辺（放生津区）を放生津大字江柱と命名した。（別紙江柱付近図）

中世の南北朝時代、南朝に加担した姫野一族は、宗良親王隠匿のため北朝の忌憚に触れ領地没収、それを石清水八幡宮へ寄進された。

江柱の名の由来は、江柱概観（がいかん）にあるように、1861年（文久元年）に始まった「西神楽川出水（「しゅっすい）後改修工事（にしかぐらがわが進められ滞水地帯を直川にして、1875年（明治8年）に「放生津大字江柱」と名付けた。

（出水（「しゅっすい）／大雨などのため、河川、湖沼の水があふれること）

「江」は、水辺・川辺を表し、「柱」は、家を表すと思いますが、柱は、「川辺の工事をするときの「杭（柱）を打ち」土砂の流出防ぐ、岸壁のことと考えられ「水害」から守ったのです。

川が「水害」をもたらす反面、生活や稲作には絶対的に必要なことから、「川の水を調整できる」ものならと、「江柱」という名が自然発生的に生まれたと想像します。

また、「獅子の絵のような田」獅子の髪（かみのけ）のような縦横無尽な水路を表しているのではないかと創造します。

2004年（平成16年）8月30日
台風16号高潮被害／江柱地区

現在も、緑町排水ポンプ場の排水路として「西神楽川」として、使用しています。

しかし、現代の地図から川の存在は消えているのです。何故この場所だけ浸水するのか知っておくべきでしょう。

古地図を見ても、内川、南立町、江柱地区（黒色）が川でした。

「江戸時代」の江柱周辺地図

町の中央に鎮座する「日吉社」は、元は山王社・山王権現（さんのうごんげん）と称し「山王町に鎮座した社（やしろ）であった。1714年（正徳4年）現在地に遷座され明治に入り「日吉社」となる。

菊屋町の「菊の紋」は、天皇家の家紋です。天皇家はもともと「日月紋」「（じつげつもん）」（幕末の時代に「錦の御旗」として使われたことで有名）を使っていました。

鎌倉時代（かまくら）、後鳥羽上皇（ごとばじょうこう）が菊の花がとても好きで家紋として色々なものに菊の紋を使うようになったのがきっかけです。

昔は日本には野菊のような小さくてかわいい花しかなかったのですが、仁徳天皇（「にんとくてんのう）の時代に中国から大輪の花を咲かせる「菊」が入ってきました。

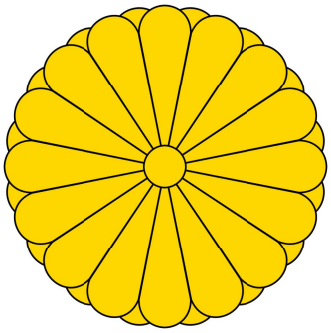
これが貴族たちの間で評判となり、後鳥羽上皇が大変気に入り家紋にするようになりました。

後鳥羽上皇といえば、鎌倉幕府を倒そうとした「承久の乱」（じょうきゅうのらん）で敗北して流刑になりそのまま亡くなってしまった人です。

「楠木正成家」菊水の家紋

その気持ちを汲んでか、後醍醐天皇もこの「菊の紋章」を使い、代々」「天皇家の家紋となったのです。現在の天皇家の御紋は、「菊花紋章」です。花びらが16枚あることから「十六八重表菊」「じゅうろくやえおもてきくもん」とも呼ばれています。この家紋は「八重菊」を家紋にしたもので、1869年からは天皇と東宮しか使用できません。

天皇家の御紋は、「菊花紋章」



「菊の紋は足利尊氏も後醍醐天皇から下賜（かし）されています。　また豊臣秀吉（とよとみひでよし）も後陽成天皇から菊の紋を贈られています。楠木正成が使った紋は「菊水」と言われています。

これは忠義に厚い「楠木正成」（くすのきまさしげ）に、後醍醐天皇が感謝の気持ちを込めて菊の紋を下賜（かし）したことによります。

「正成は天皇家の家紋などあまりにも身に余ることだ」と思いました。

それで「正成」は「菊の花が川の流れにゆっくり身を任せているような美しい家紋」を使うようになったのです。これが「菊水の紋」です。

この西神楽川の地で、農業・漁業・物流・弁財船等を取り仕切る「豪商の倉庫12棟の他、網子の住居、道具納屋等の館」がありました。

その屋号は、「菊屋」であり、名は「中瀬七造」と言いました。「中瀬七造」の先祖は、この「楠木正成の重臣」であったことから、「菊水（きくすい）の紋」を家紋とし、屋号を「菊屋」としたのです。西神楽川に準ずる道は「菊屋小路」と呼ばれていました。

このことから「菊屋町」となったのです。

（2）西神楽川の地層（帯水層）

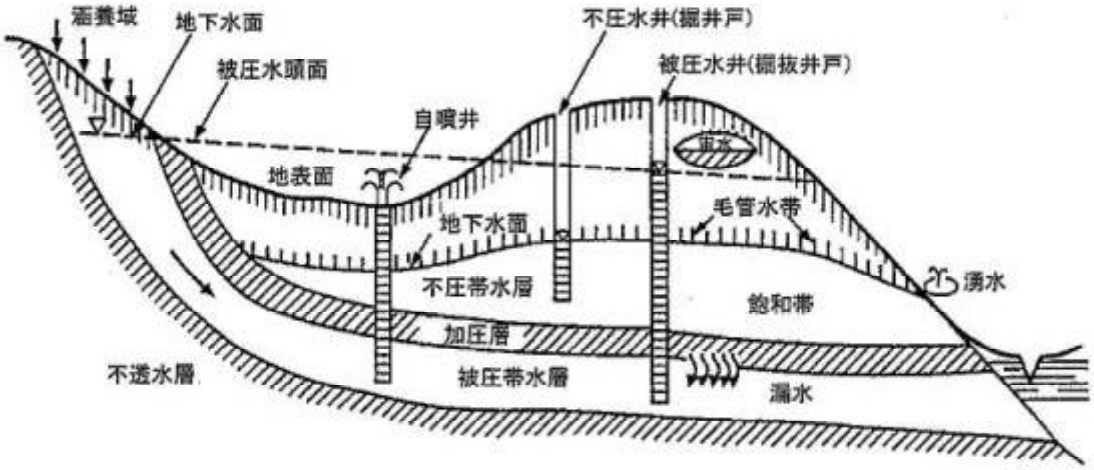
帯水層（たいすいそう）とは、地下水は雨水や地表水から補給されながら、地中の間隙を満たして存在している。透水性や貯留性（ちょりゅうせい）が良く地下水が循環しやすい地層を「帯水層」（たいすいそう）と呼ぶ。

「帯水層」は、透水性が小さい地層（加圧層:かあつそう）により上下を囲まれるか、上方は加圧層に下方は不透水層（ふとうすいそう）に囲まれた帯水層を「被圧」（ひあつ）帯水層」、上面が大気圧と釣り合った状態にある地下水を「不圧　帯水層」の 2 つに区分できる（下図）。

「帯水層」は一般的に礫層（れきそう）、砂層（さそう）、石灰層、溶岩層などの地層に存在することが多い。地域によっては、不透水層（ふとうすいそう）をはさんで複数の「帯水層」が分布する場合もある。

帯水層の性質を示す指標として「透水（とうすい）係数（けいすう）」がある。「透水係数」（とうすいけすう）は地層中の一区間を単位時間当りどれくらいの地下水が通過できるかという量を示す。

透水性や貯留性が良く地下水が循環しやすい地層を「帯水層」（たいすいそう）の図



(6) 三日曽根町・四日曽根町・善光寺町・長徳寺町

「吾妻鏡」（あずまかがみ）（鎌倉時代に成立した日本の歴史書）によると、1239年（延応元年）越中国東条・河口・曽根・八代（現在の氷見）の4箇保地頭（よんかほじとう）らは、九条道家（くじょう　みちいえ）に対して、京都東福寺領地として、京上年貢100石の地頭請所契約（じとううけおいけいやく）でその所職を寄進している。

「九条　道家（くじょう　みちいえ）／鎌倉時代前期の公卿。太政大臣・九条良経の次男。官位は従一位・准三宮、摂政、関白、左大臣。九条家 3 代当主。
地頭請所契約（じとううけおいけいやく）／中世における請所の一つ。地頭が荘園領主・国衙に対して年貢の徴収納入を請け負う契約。

その後九条家の支配は不安定化し、南北朝期（室町時代1368年-1392年には、幕府と深い関係をもつ「奈良西大寺末善興寺」（ならさいだいじすえぜんこうじ）現廃寺）が曽根地内に設立された。いろいろな時代変遷があるが、今も「善光寺」としての地名が残っている。

また、「奈良西大寺末善興寺」（ならさいだいじすえぜんこうじ）の尼坊（にぼう）を「長徳寺」と言い、紺屋町の「大楽寺」は元「長徳寺」と称した。長徳寺は、「南長徳寺」に寺地があったと言われている。

尼坊（にぼう）:僧尼（じょせい）の住宿する所。

「三日曽根村」は、大村で後に「四日曽根村」を分村したと言います。1648年～1652年（慶安年間）には、放生津町寄りに集落が出来「三日曽根出町」と呼ばれた。

同町の東部に「横町」、「横町」と連なる竪（たて:上下方向）の町に「やくわん町」の地名がのこる。もともと、「曽根・曾根（そね）」とは、日本の苗字、地名である。

「曽根」「そね）の語は、河川の氾濫などで伸びた高地を意味し、自然堤防を指した。また、埆（そね:石の多い、やせた土地）と書き、石の多い痩せた土地を指す。

このことから、この放生津に流れるの「上牧野川・牧野川・前田川・田町川・大石川・西神楽川」などの内川支川が作り出した地域であり、地名であると思います。

(7)六渡寺町

「六渡寺村」には、「六道寺」という大きなお寺があったことに由来する。

六道（ろくどう）とは、仏教において衆生（人間）がその業の結果として輪廻転生（（りんねてんしょう）／人が死ぬと新しい生命に生まれ変わる）することの「6種の世界」のことであります。

①天道（てんどう）

太陽が天空を通過する道をさすが、天体の運行には一定の規則性があるため、転じて天然自然の摂理、天理を意味するようになった。

②人間道（にんげんどう）

人間道は人間が住む世界である。四苦八苦に悩まされる苦しみの大きい世界であるが、苦しみが続くばかりではなく楽しみもあるとされる。また、唯一自力で仏教に出会える世界であり、解脱（げだつ）し仏になりうるという救いもある。　（解脱（げだつ）／人間生活に伴うあらゆる苦悩や迷妄の束縛から開放されて，完全に自由になることをいう）

③修羅道（しゅらどう）

修羅道は阿修羅（あしゅら）の住まう世界である。修羅は終始戦い、争うとされる。苦しみや怒りが絶えないが地獄のような場所ではなく、苦しみは自らに帰結（きけつ:最終的に行き着くこと）するところが大きい世界である。

（阿修羅（あしゅら）／仏教の守護神。略して修羅（しゅら）ともいう）

④畜生道（ちくしょうどう）

畜生道は牛馬など畜生の世界である。ほとんど本能ばかりで生きており、使役されるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされる。

⑤餓鬼道（がきどう）

餓鬼道は餓鬼の世界である。餓鬼は腹が膨れた姿の鬼で、食べ物を口に入れようとすると火となってしまい餓えと渇きに悩まされる。「他人を思わなかったために」餓鬼になった例がある。

⑥地獄道（じごくどう）

地獄道は罪を償わせるための世界である。地下の世界。

このうち、天道（てんどう）、人間道、修羅道を三善趣（さんぜんしゅ））といい、畜生道、餓鬼道、地獄道を三悪趣（さんあくしゅ）という。

小矢部川河口には、六渡寺湊があり、北前船の拠点として栄えた。渡船場は、現在の庄西町の1丁目の「八嶋倉庫付近」に位置し、江戸時代上流の上渡し（能町渡）に対し下渡と称し、また、「大渡」とも呼んで「放生津湊口の小渡」に対称された。

六渡寺湊から小矢部川をさかのぼり、砺波・石動方面へ、千保川（せんぼがわ）・野尻川（のじりがわ）に通ずる舟運が開かれていた。1609年（慶長14年）前田利家が高岡城を構築した時も、資材運送に利用された。また、能登方面の物資の多くは、六渡寺湊で中継されて内陸部に運ばれました。

(8)山王町

山王社（現日吉社）が鎮座（ちんざ）したことに由来する。1581年（天正9年）神保長住「（じんぼう ながずみ）」は、放生津の八幡領町・同三宮方に制札を発給しており、山王社は、三宮方に含まれたと考えられる。 （三宮方／放生津八幡宮・神明宮・山王社）

1714年（正徳4年）には、立町へ移ったとしています。

鎮座（ちんざ）／神が一定の場所にしずまりとどまること

1854年～1860年（安政年間）には、放生津町の「町年寄り役」の「大西家」が放生津八幡宮祭礼で奏でる「太鼓台」（たいこだい）を寄進し、後に曳山の列にも加わり「大旗台」（だいきだい）と愛唱された。（現存）

(9) 中町

奈呉町の東に位置し、東は山王町。浜往来（はまおうらい）が通る。北は富山湾に面し砂浜が続く。大通り（浜往来、中町通り）の奈呉町境には放生津町の「高札場」（こうさつば）が立っていた。大きさは、高さ1丈5尺（約4.5m）／長さ3間5寸（5.15m）／幅6尺（1.8m）（新町万覚帳:近岡文書）であった。

「高札場」（こうさつば）／幕府や領主が決めた法度（はっと）や掟書（おきてがき）などを木の板札に書き、人目のひくように高く掲げておく場所のことです。

高札場南の内川には放生津新町へ至る「中橋」が架けられていた。1692年（元禄5年）放生津町の町年寄役で「四十物問屋の松屋武兵衛」（まつやぶへい）が八幡宮祭礼時の曳山を「御神楽山」として再建し、1765年（明和2年）には板車の太鼓山に改良し、更に1796年（寛永8年）「御神楽式回転山」という特殊な構造をもつ「通称:廻りズッコ（老人）」と言われる曳山を作成した。

また、1689年（元禄2年7月13～14日）「松尾芭蕉（まつおばしょう）の奥の細道」に出てくる「那古（なご）の浦」は、「那古の浦に至った芭蕉は、さらに同じく「万葉の歌枕の地である有磯海（ありそうみ）」、氷見の藤浪（たごのふじなみ）を訪れようとします。しかし放生津の人から「ここから五里もあるし、行く先には泊めてくれる宿もない」とおどされ、断念。そのまま高岡の街へ向かい、ここで一泊。」
「わせの香（か）や分入（わけいる）右は有磯海（ありそうみ）」と詠んだ。その後に、この「中の橋」を渡り高岡へ向かった可能性が高い。

(10) 奈呉町

町名は「万葉集」にみえる「奈呉の浦」に由来する。町中央には内川をせにして「気比神社（けひじんじゃ）・住吉社（すみよししゃ／現気比住吉神社）が鎮座している。中世当地一帯は、越前敦賀の「気比神宮領」であった。気比宮の門前地は「宮町」、後の「恵比寿町」と称され、西方を「大奈呉」と呼んでいた。

内川の湊口には、「魚場」があり栄えた。しかし、1821年（文政4年）放生津町大火で逃げ道を失った多くの人達が焼死した。そこで内川の湊口に「長さ32間（57m）」の湊橋が架けられ、浜往来は古新町から湊橋を渡って中町を通ることになった。内川の「中橋」は、1650年（慶安3年）に架けられたが、1688年（貞享5年）に中町の境目に架け替えされた。放生津八幡宮祭礼時の曳山は、1692（元禄5年）に創建された。

「気比住吉神社」は、1880年（明治13年）住吉社が炎上し、以後、「気比神社」（気比宮）に仮鎮

座したが、1928年（昭和3年）両社が合祀（ごうし）され現社名になっている。

住吉社の祭神は、奈呉の浦海中より迎えた神「表筒男命（うわつつのおのみこと）・中筒男命（なかつつのをのみこと）・底筒男命（そこつつのおのみこと）」とされ、気比神社の祭神は、「仲哀天皇」（ちゅうあいてんのう）である。気比神社が勧請されたのは、鎌倉時代初期以前（1185年以前）で、奈呉の浦一帯が越前敦賀（えちぜんつるが）の気比神宮の神領であったことによる。

鎌倉後期（1192年-1333年）から室町期にかけて（室町時代1338年-1573年）越中では、放生津を中心に「時衆」の発展が目覚ましかったが、時衆がこの越前・越中の気比神社の発展に深く関わっていたことが、気比社の発展の背景にある。

漁場（市場）は、1715年（正徳5年）に、これまでの「特権的40集商人制度の6人問屋」から、新しく生魚漁場改所を設立し、1717年（享保2年）には、仕法書12ヶ条が定められ魚吟味6人によって運営されることになっていった。　（仕法書（しほうがき）／商品注文の際、その品名・種類・形状などを明細に書いて送る書き付け）

漁場は、「魚売り場・算用場（さんようば）・魚改場（さかなかいば）」からなり、改所では「突棒・槍・長刀・十手・差網・手枷（てかせ）」などを常備していた。また、漁場への出入りは登録制で「魚商鑑札」を受けた。　（算用場（さんようば）／会計）／魚改場（さかなかいば）／加工）

1715年（享保の頃）の鑑札（かんさつ）所有者は、70人～80人で200人程の手合（下買）がいたが、1781年～1789年（天明の頃）には、鑑札所有者は130人と増えていった。
また、四十物商売（塩干物）35人／行商23人を数えた。

1821年（文政4年）3月28日の放生津大火は、瞬く間に1150戸を焼き払い、湊口に逃げた住民は橋がなかったため、48名も焼死しました。

この地獄絵さながらの光景は加賀藩検視役人の同情を呼び、長さ30間（55m）、幅9.5尺（2.9m）の板橋が架けられ、俗に「おたすけ橋」と呼ぶようになりました。
古新町と奈呉町を結ぶ唯一の橋となりました。明治28年「湊橋」と改称しました。

(11) 東町 ・天神町

東町は、荒屋村の北に位置し、西境は東町大通りに面して鎮座（ちんざ）する「神明宮」（しんめいぐう）。北は富山湾で砂浜が続く。町東方に「放生津八幡宮」が鎮座する。放生津町の浜往来は、八幡宮を門前に面し、同社横を通って放生津潟の北、明神新村（みょうじんしん／堀岡）へ延びていた。
当町の浜は、「東浜」と呼ばれ「東浜納屋」1,673歩余りがあった。

（1歩（日本では伝統的に長さとしては6尺、面積としては6尺平方である。つまり、長さとしては1間、面積としては1坪に等しい。）

また、同地の大松は、放生津沖の「台網敷設」（だいあみふせつ）の目印となっていた。

台網（だいあみ）／定置網の一種です。「氷見は定置網発祥の地である。その起こりは天正年間 1573 年（今から約 427 年前）頃、ワラを材料にしたワラ台網が敷設された。その後、先人の知恵と努力によって技術の改良が重ねられ、明治 40 年に宮崎県の日高式大敷網が大境沖島漁場に導入され鰤の大漁が続いた。」

1848年～1854年（嘉永年間）放生津八幡宮北の砂浜べりに放生津台場を築く計画があった。（放生津八幡宮社地絵図:高樹文庫）。

当町在中の御用木材商の「木屋弥兵衛」は、放生津町の初代町年寄役を勤めた。木屋が自前で出した豪華な曳山は、放生津八幡宮祭礼における東町曳山のはしりとなった。曳山は、1718年（享保3年）の創建であった。

町年寄役（まちとしよりやく）／経験の多い老人として当然なすべき役目

天神町は、「天満宮」（てんまんぐう）があったことに由来する。
「天満宮は「天神」（てんじん）、「天神さま」「天神さん」とも呼ばれる。
社名は、天満神社（てんまんじんじゃ）、祭神の生前の名前から菅原神社（すがわらじんじゃ）、天神を祀ることから天神社（てんじんしゃ）等となっていることもあり、また、鎮座地の地名を冠していることもある。

「ただし、「天神社」については、天津神を祀る（まつる）神社という意味のものもあり、これは菅原道真（すがわらのみちざね（845―903））とは関係がなく、全国各地に在りその発祥は不明である。」

「菅原道真が亡くなった後、平安京で雷、大火、疫病（えきびょう）などの天変地異が相次ぎ、清涼殿落雷事件（（せいりょうでんらくらいじけん）で、大納言（だいなごん）の藤原清貫（ふじわらのきよつら）ら道真の左遷（させん）に関わったとされる者たちが、相次いで亡くなったことから、道真は大自在天「（だいじざいてんじん）」や大威徳明王「（だいいとくみょうおう）などと関連付けて考えられるようになった。

「天満」の名は、道真が死後に送られた神号の「天満（そらみつ）大自在天神」から来たといわれ、『日本書紀』の「虚空見（そらみつ）」から、あるいは「道真の怨霊（おんりょう）が雷神となり、それが天に満ちた」ことがその由来という。

虚空見（そらみつ）／空から見ている神様。／
怨霊（おんりょう）／自分が受けた仕打ちに恨みを持ち、たたりをしたりする、死霊または生霊のことである

怨霊（おんりょう）の記憶が薄れていくとともに、また太平の世になるにつれ、道真が優れた学者であったことから、天神は「学問の神様」ともされ、多くの受験生が合格祈願に詣（もう）でる。参拝して筆を買うと受験に利益があるともいう。

（12）古新町

1649年（慶安2年）放生津新町町立以前は、「西の浜」・「浜新町」と呼ばれていたが1661年～1673年頃から「古新町」と称されるようになった。（新湊市史）湊口に面して澗改所（まあらためしょ:港税関）が置かれ、住吉社（現観音堂）がその南に鎮座していた。

「西の浜」・「浜新町」から「古新町」へと変遷していく過程は、「古い漁業の地域であるが、新しく発展しようとする意気込み」が感じられます。

湊口は、「小渡」と称され、1821年（文政4年）に湊橋が架けられた。

当町の「尾山屋久右衛門」（おやまやきゅうえもん）は、有力な魚問屋で、1598年（慶長3年）に放生津八幡宮の祭礼に自前の曳山を仕立てて、西放生津を曳き回った。これが放生津町における初めての曳山で、「くじ抜け1番」として各曳山の先頭に曳かれるようになった。

（13）新町

町名は、「放生津新町」に由来し、単に「新町」とも通称される。1649年（慶安2年）内川縁の三日曽根村字稲荷の五千歩と四日曽根村字来光寺川田割五千歩と合わせて一万歩を割って成立した町である（野村屋旧記）。

1656年（明暦2年）には、地子米皆済状（上納米）や銀衲（年貢の代わりに銀上納）をする際、大石川を境に東新町・西新町と区分され、それぞれに二人の組合頭を置き、町肝煎り（世話代表方）が統括した。

1748年（寛延元年）放生津湊の給人米（武士に支給される米）11,600石の出津米割出表（でつまいわりだしひょう）によると、3軒の蔵宿を始め、「渡海船の船持・網元・酒・醤油・味噌などの醸造業があり、諸雑貨品を販売する商店が建ち並ぶ、放生津町と共に射水郡の商業の中核をなしていた。（新湊市史）

1844年（天保15年）江戸城本丸焼失に際し、80,000両の上納割当金を受けた加賀藩は、領内の富裕商人から銀2,970貫を借銀したが、「新町の綿屋彦九郎」が150貫目を上納した。

1848年～1854年（嘉永期）の発行とされる「見立角力三ヶ国長者鏡」によれば、「放生津新町の綿屋彦九郎」は、「西方関脇」と記載されている（石川県史）。

銀:150貫目　　銀一貫は現代で約1,250,000円です。
　　1,250,000×150貫＝1億8750万円
金1両:銀貨60匁（もんめ）:75,000円
　銀:150貫目:2,500両

「見立角力三ヶ国長者鏡」（みたてすもう 3 カ国ちょうじゃかがみ）／
相撲（角力）に見立てた「加賀、能登、越中の 3 国」の金持ち番付表のこと。

（14）荒屋町・倉屋敷

1663 年（寛文3年）には、加賀藩の御蔵5棟、大作食米御蔵（だいさくしょくまいこめおんくら）1棟の他、御蔵番屋敷2棟が建てられた。後に大作食米御蔵は廃され、内川対岸の放生津城跡に新設された放生津御蔵（小学校）に合併された。

また、塩問屋松屋定次郎（まつやさだじろう）が御塩中出蔵3棟を村北辺にに建てた。

1778年（安永7年）の家数は58軒、1833年（天保4年）94軒、1859年（安政6年）145軒を数えた。

1835年（天保6年）の放生津の大火で荒屋村及び御塩中出が蔵類焼し、その後整地され跡地に「倉屋敷」が建てられた。1845年（弘化2年）の大火でも荒屋村、放生津東町東部が全焼し、東町光明寺横道の東裏通りかけて、荒屋村の新規町である「今町」ができた。

荒屋の「不動はん」と通称される「曹洞宗西福寺」は、1900年（明治33年）に宮城県仙台市から移ってきた。「鎮守は、荒屋神社、倉屋敷町は、東町神明宮」としている。

町中央を東町西部へ通じる通称した「倉屋敷道」が南北に貫き、この道の北端砂浜沿いに、かつて倉屋敷の鍵を管掌（かんしょう）したことにちなむ「倉ノ丁（くらのちょう）」の地名が残る。

管掌（かんしょう）／つかさどること。監督して取り扱うこと。

当地の神保寺地内内川縁に、富山商船学校が誘致された。

富山商船学校は、全国に5つある商船高専のうち唯一日本海側にあり、百年の歴史の中で、数多くの国際航路の船長、機関長を輩出した。

1985年までは全寮制で、女性は入学できなかった。現在は「射水市立新湊中学校」となっている。

1906年（明治39年）7月3日 － 新湊町立新湊甲種商船学校として創立。

1909年（明治42年）4月1日 － 富山県へ移管、富山県立商船学校となる。
1925年（大正14年）4月1日 － 機関科設置
1939年（昭和14年）8月19日 － 文部省へ移管、富山商船学校となる。
2006年（平成18年）7月3日 － 創立100周年を迎える。
2009年（平成21年）10月 － 富山工業高等専門学校と統合し現在は、「富山高等専門学校」（射水キャンパス）となっている。

平成21年10月に富山工業高等専門学校と富山商船高等専門学校の統合・高度化再編によって誕生しました。工学系4学科，人文社会系1学科，商船系1学科の計6学科及び4専攻から成る専攻科があり，多様な教育研究分野を有していることが大きな特徴です。
「創意・創造」，「自主・自律」，「共存・共生」を教育理念に掲げ，分野間の連携と2キャンパス間の距離を超えた融合を図って，教育・研究・地域貢献活動を行っています。

本郷キャンパスと射水キャンパスの2キャンパスを有する統合・高度化再編校です。
全国51の国立高専のうち4校しかない統合・高度化再編校の1つである本校では，単に業務を的確に行うのみならず，柔軟性と実行力をもって他の教職員と協同して，より質の高い教育・研究支援や地域貢献を推進していく力となる職員の育成を目指しています。

（15）放生津城・二の丸・二の丸本町・神保寺

名越流北条氏（なごえりゅうほうじょうし）は、鎌倉時代の北条氏の一族。鎌倉幕府2代執権・北条義時の次男・北条朝時を祖とする。名越の地（鎌倉）にあった祖父・北条時政の邸を継承した事により「名越」を称し、母方の比企氏（ひきし）の地盤を継いで代々北陸や九州の国々の守護（しゅご）を務めた。

鎌倉幕府の滅亡に繋がる1333年（元弘3年）「元弘の乱」では、名越流最後の当主・北条高家が六波羅探題救援六波羅探題（ろくはらたんだい:は、鎌倉幕府の職名の一つ。承久3年（1221年）の承久の乱ののち、幕府がそれまでの京都守護を改組し京都六波羅の北と南に設置した出先機関。探題と呼ばれた初見が鎌倉末期であり、それまでは単に六波羅と呼ばれていた）。のため足利高氏と共に上洛し、後醍醐天皇方と戦って討ち死にした。

越中守護であった名越時有（北条時有）（なごえときあり）は越中守護所（放生津城）で戦ったが反対派の御家人にに囲まれて敗れた（この様子は『太平記』にも悲話として伝わっている。）反幕府側の御家人に囲まれて落城する際の光景は『太平記』に記述されるものとなった。

鎌倉幕府の越中国守護所として、正応3年（1290年）に執権北条氏の命を受けて北陸道の守護職として越中国に赴任した名越時有（北条時有）がこの地に城を築いています。

それまでの放生津城付近には、鎌倉中期（1222年～1287年）に守護所（行政機関）が置かれ、北条一族で守護職を勤めるておりました。

その後、室町期（1336年～）には、畠山氏（はたけやまし）が守護となると、1443年（嘉吉3年）「神保氏」が、婦負・射水の二群の「守護代」を勤め、「放生津城」を居城（きょじょう）とした。

1493年（明応2年）足利義材（あしかがよしき）が細川政元（ほそかわまさもと）によって将軍を廃されると（跡目相続争い）、京都を脱出して、放生津の神保長誠（じんぼう ながのぶ）のもとへ逃れ、同7年まで滞在しました。

足利義材（よしき） / 義尹 （よしただ）/ 義稙（よしたね）像

この地で「越中公方」として放生津政権を樹立しています。「越中公方足利義材」のもとへは、公家・大名が出仕し、禅僧、歌人ら多くの文化人も訪れるようになり、これにより放生津は北陸の政治・経済・文化の中心地として栄えています。

この地は海に近く港があり、交通の便も良く、京都から船で移動するにも便利だったことが背景にあるでしょう。

この頃は、神保氏が極めて強勢だったと言えます。そうでなくては将軍がこの地へ逃れてくるとは思えませんので、将軍が越中に逃れてきたのはもう一つ理由があり、神保氏の主君である畠山政長が細川政元に滅ぼされていて、それを恨みに思っている神保氏であれば、快く自分をかくまってくれるであろうという読みがあったのだと思われます。

後に足利義材は将軍職に復帰しますが、管領（かんれい）細川高国 （ほそかわたかくに）と対立して、再び逐電することになり、大永3年（1523年）4月9日（4月7日とも）に阿波撫養（現在の鳴門市）で死去しています。享年58才でした。

（管領（かんれい）／室町幕府において将軍に次ぐ最高の役職）

戦国時代は、神保慶宗（じんぼう よしむね）が当主となり、1520年（永正17年）神保氏は越中へ侵攻した「長尾為景」（ながお ためかげ）に敗れ、富山の新庄で戦死した。

（長尾為景（ながお ためかげ／越後国の戦国大名。越後守護代・越中国新河郡分郡守護代。上杉謙信の実父。米沢藩初代藩主・上杉景勝は外孫に当たる）

1585年（天正13年）「羽柴秀吉」（はしばひでよし）による佐々成政（さっさなりまさ）攻めに際し、前田氏の武将「奥村永福」「（おくむら ながとみ）」が能登の末森城（押水町）から移って浜往来の押さえとして「放生津城はとても重要な城だ」としています。

「前田家」治下には中川光重「（なかがわ みつしげ）、山崎長鏡「（やまざき ながのり）」が城代を務めたが、「元和の一国一城令」により廃城となったとみられる。「放生津城」も長尾軍の攻撃で落城し、焼失してしまいます。

一国一城令（いっこくいちじょうれい）／江戸幕府の大名統制策の一つ。
「 一領国一城」という趣旨のもとに、大名の本城（居城）を除くすべての支城を破壊することを目的としたもので、大坂の役後の 1615 年（元和 1）閏（うるう）6 月、武家諸法度（しょはっと）に 1 か月先だって発布された。」

このため、神保氏は一時衰退するものの、神保慶宗「（じんぼう よしむね）の子、長職「ながもと）が神保氏を再興して1543年（天文12年）には富山城を築城して拠点をここに移しています。

放生津城も神保氏の手によって再建されたと思われます。しかし越中国は、この後は上杉軍と一向一揆勢、さらには織田軍の草刈り場と化していました。

放生津城は、神保氏時代は守山城の支城となっていたと思われますが、守山城主「神保氏張」（うじはる）は上杉軍が侵攻してくるとこれに降り、織田軍が侵攻してくると、佐々成政に降ると、どちらもうまく立ち回っていたので、放生津城も落城の憂き目には遭わなかったのかもしれません。

天正13年（1585年）には佐々成政が豊臣秀吉に降伏して、越中国は前田氏の領地となり放生津城も前田氏の持ち城となります。

しかし、放生津城は江戸時代の初め頃までに廃城（はいじょう）となっています。この時点では、既に戦略的価値がなくなっていたと思われるので城としては廃城になったと思われますが、この城は海に近いので舟を城の内部にまで引き入れて荷物を搬出入するには便利だったので城跡は明治時代まで「前田家の米蔵屋敷」として使われていたようです。

その後、天正9年（1581年）に織田軍の攻撃により落城し、佐々成政が重臣・佐々平左衛門や佐々源六（勝之）、直属の馬廻り衆を入れて守っていた。

（越中 放生津城-城郭放浪記）

二の丸は、城の本丸の外側を囲む城郭を指すものであり、外敵を防ぐための防御施設である。城内は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・北ノ丸等と表現され、その周辺には、藩主の住まいや政務の場としての中枢的場所を占め、重臣たちの邸宅があった。

江戸時代の「柴家の放生津城総絵図（部分）では、「御蔵」を中心に「二の丸割・二の丸後割」の記載がある。

神保寺の町の由来は、前述のとおり、「神保長誠」は、越中国の放生津に足利義材を迎えて、「正光寺」を改装して将軍の御座所とした。このことにより「足利義材」は、「越中公方」と呼ばれるようになった。「神保長誠」の神保と「正光寺」の寺をとって「神保寺町」と名付けた。きっかけは、1930年（昭和5年）9月5日「東町・荒屋大火」での罹災者（戸数37）により、1932年（昭和7年）12月に町立てする。

(16)奈呉の浦

「奈呉の浦」(なごのうら)は、富山湾(越中国)と大阪湾(摂津国)の二か所の歌枕があります。それぞれ万葉の時代から詠まれている。富山の方は大伴家持とその取り巻きメンバーにより秀歌が残されています。

大阪の方は、住吉の海岸のことでありますが、現在では場所を特定できません。その他「那古の浦」と書いて、四日市の沖合の海を指すことがあり、蜃気楼で有名です。

奈呉の意味Ⅰとしては、名前の由来は、鹿児島で帯のことを「きび」といい、この魚の体に走っている線が帯に見えることから、「きびなご」と」付いた。なごは、「小さな魚」という意味だとしています。

きびなご

「ちめんじゃこ」のような「小さい魚」の呼び名は、

1.「きびなご」(漢字では、黍女子・黍魚子・吉備女子、吉備奈仔)

2.「いかなご」(こうなごとも呼ぶ:漢字で書くと「小女子」。)

「きびなご」は、体側に美しい銀色と青の帯をもつ小さな魚で、産卵期である春先に多く獲れたことから、昔は肥料として、またはカツオやタイの一本釣り用の餌として、利用されていました。

「きびなご」とは、

「鹿島県・山陰隠岐以南の暖流域の沿岸域に小さな群れを作る。カタクチイワシと同じくらいの大きさで漁獲量は少ないが、地域地域で愛されている。伊豆半島以西でよく食べられているもの。カタクチイワシやウルメイワシなどと比べると漁獲量は少ないものの、味のよさから節供などに作られる料理にも使われている。干ものなどもとても味がいい。紀伊半島、四国、九州各県では名物になっている。水産基本情報ニシン科の食用魚。南日本に生息するもので鹿児島県などで特に珍重する。刺身、干物、唐揚げなど。加工品としては西伊豆の干物が有名。」

漢字表現は、それぞれが当て字だと思うが、共通して言えることは、小さな女の子のように、かわいい小魚」と言う表現では一致する。

また、「那古」(なご)の意味でも、「美しい・ゆったりとした・豊かさ」と昔の豊穣の海(放生)の海面に小魚が溢れている様子が目に浮かぶと感じております。

「奈呉の浦」の名前の起源は、定かではないが、私達の先人の思いは、「豊かさと感謝」のような気がします。

奈呉の意味は、「奈」は、「からなし」という果樹を意味する漢字です。「からなし」は漢字で「唐梨」と書き、バラ科のカリンの別名とされ、古くはベニリンゴを表す名称としても使われています。

「奈」は本来、「木」と「示」をくっつけてできた「**奈**（ダイ）」という文字でした。「示」はお祈りなどの神事で使われる文字で、「大（木）」は大地をおおう大きい樹を表すことから、「神事に用いられる果樹」を意味するようになりました。

また、呉市の説明文には、船用材の榑（くれ）の製材を生業する船木郷があったことから「榑（くれ）と呼ばれ「呉」になった！としています。…

榑（くれ）とは、①東方の日の出る所にあるという神木の名「榑桑」（ふそう:日本歳時記）に用いられる字。 ②くれ。へぎいた（折ぎ板:杉・檜（ひのき）などを薄く削って作った板。折敷（おしき）・折り箱などを作る。）。また、皮のついたままの丸太を意味します。

「奈」と「呉」を別の字で書くと「**奈**」・「榑」になるが、「唐梨」（ベニリンゴ）を祭壇にささげ、「榑」（くれ）で造船した舟の安全を祈る「浦」の神社が「奈呉の神」と言うことになる。

3.あとがき

今回の調査に際し、無知な自分に「ホトホト･･･」嫌気が指し、それなりにまとめたつもりですが、地域によっては、調査不足を強烈に感じております。

古地名には、それぞれの意味･理由･歴史があり、その土地の人々の暮らしを伺うことができます。

放生津の南に「久々江」という地名があります。この言葉の語源は、「鵠」（くぐい）から来ています。「鵠」は、「白鳥の古称」で渡り鳥です。

年に一度「久しぶりだね、久しぶりだね、この水辺によく来たね！」と村人が歓迎した地名でしょう。

姫野地区にも、「金屋」という地名がありますが、高岡市の金屋町と同様に「放生津城の金物」を創っていた場所だったからでしょう。三日曽根と四日曽根の間に出来たから「中曽根」となります。

まだ勉強途中の皆さんには「文章や言葉」理解できない、読めない文章だろうと思います。しかし、必ず出来るようになります。

私も、まだまだ、分からない「地名･言葉など」多くあります。知らないことを知る喜びは調べた人にしか分かりません。それが「学ぶ」と言うことかもしれません。

私も、これから時間の許す限り精進致しますので、共に学びましょう。

参考文献･････････････････

1.日本歴史地名大系（平凡社）
2.放生津八幡宮社殿再建150年記念小誌
3.射水市資料
4.「見る新湊近代百年小史」新湊市役所
5.「新湊市史」新湊市史編さん委員会
6.「放生津城を掘る」:久々忠義
7.「コトバンク」（NET:PC）:フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
8. ヤフー
9. 「日本海学推進機構」

参考資料 001

宮林家「綿屋彦九郎」について「日本海学推進機構」

「金沢藩領であった越中西部の高岡は、大阪に次ぐ生産量を誇っていた新川木綿（にいかわもめん）の産地（越中東部新川地方）への流通中継地として藩が綿場を設定した。

このため、畿内から綿を運び入れる「伏木湊」や「放生津湊」の北前船主や廻船問屋、そして高岡綿場商人が綿流通で利益を分け合っていた。

また高岡の後背地には砺波平野が広がっており、米生産が盛んだった。このため、伏木湊や放生津湊の北前船は、綿と米の取り扱いが多かったが、近代に入り、綿織物や綿糸の輸入が増加したのを受けて、綿・米から北海道産物取引に本格的に転換した（以下越中に関しては中西2009、高瀬1997による）。

伏木の「鶴屋（堀田）善右衛門家」の養嗣子となった「堀田勝文」は伏木町長、県会議長をつとめたが、その息子が作家の「堀田善衛」である。

伏木湊に隣接した放生津の「綿屋宮林家」は、能登国守護畠山氏に仕えた武士だった先祖が砺波郡に移り、漁具・網を作る藁工品を放生津の漁民に供給していたが、後に放生津に転居して、漁業経営に乗り出したという伝承がある。

18世紀には網元として大規模に鰤漁や魚肥となる鰯漁を行うようになった。その後19世紀前半に和船を所有し、畿内で買い付けた綿を伏木に運び（屋号の由来）、また北海道交易も行う買積経営に乗り出すとともに、金沢藩・富山藩の領主米輸送に携わり、1840年代以降に村役人を務め、幕末期から近代に入っても土地取得を進めた。

宮林家は、藁工品資本が漁業資本、海商資本、地主資本に置き換わっていったとされる。「宮林彦九郎家」は明治10年代に「草高二千石、網高二千石、合わせて四千石」と俗称された。

海運経営からは1880年代前半の松方デフレ期以降に撤退した。

「綿屋宮林家」は、北前船主を先祖に持つ「藤井能三」とともに、三菱汽船の伏木寄港を誘致し、次にはその横暴に対抗して北陸通船社を創立し、三菱に対抗する勢力を結成した。

明治20（1987）年以降「船の経営」をやめたが、高岡米会所、銀行などの役員活動を通じ地元財界のリーダー的な存在であった。

参考資料002

中瀬七造について（菊屋町由来）

中瀬七造（菊屋）

① 中瀬家の始まり

屋号の菊屋：主君であった楠木正成の紋章「菊水」による。

先祖：楠木正成の遺臣、中瀬某

某は初め、河内（現在の大阪府南河内郡）に在住したが、建武中興（1331 年）の頃越中入りした。その末裔が慶長年間（1596～1614）の豪族中瀬五郎右衛門宗慶であり、元和偃武の頃、度重なる戦禍を嫌って野に下り射水郡放生津四日曽根村（現在の中央町）に在住し、農業を営んだ。後に改名して又兵衛（初代）

寛永（1748～1756）の頃、2 代目伊兵衛（伊平）の 2 男は、分家して中瀬七左衛門（初代）と称し、放生津新町（本町三丁目）に居を構えた。以後、5 代にわたって大きな資産を築いていった。

初代七左衛門：農業を営み、次第に田畑を広げていったが、時代の趨勢に伴い、漁業志向も強くなっていった。

二代七左衛門：農業と漁業を両立させ、富を築いていった。

三代七左衛門：天保・弘化（1,830～1847）には弁財船数隻を所有し。豪商と言われるまでになった。この頃から加賀藩の御用商人となり、米穀の廻送や廻船御用などを引き受けていた。

四代七左衛門、改め七造：

五代七造：1862 年、嫡男がいなかったので、親族の二男伊七郎と娘ヨネを縁組

最盛期の持高 3000 石と伝えられている。

農業とともに国内貿易と沿岸漁業も全盛に達していたし、その後も外国貿易や北洋漁業、捕鯨やラッコ猟業へ進出し、弁財船もとより捕鯨船などの西洋型帆船も所有し、大型帆船だけでも三代の時代と合わせて 20 隻はあったと推定される。

また、地元の漁業では、新湊から伏木の沖合いにかけて「中瀬の配」と称する定置網 5 統程保有し、沖合い漁業でも網元として活躍した。それら、漁業に従事する多数の漁船と大勢の船方、網子らを抱えていた。

放生津内川の南側の新町１７７ 番地には菊屋中瀬家本家屋敷とそれに付属する蔵 7 棟が建ち並んでいた。

また、菊屋町の神楽川沿岸には商用の仕事場や米蔵、鰊蔵を始め、雑穀、雑貨、呉服、太物、海産物、生活必需品、漁具などを収納する倉庫 12 棟と船方、網子らの住居や関連建物多数が軒を並べ、神楽川に通ずる主要道は「菊屋小路」と呼ばれていた。菊屋町町名の由来

新湊町名誉助役でもあった。（高岡市立所蔵図書）

中瀬家の没落　その原因

- 明治新政府が財政窮乏対策と大名の負債肩代わりのために発行した「太政官札」半強制的割り当て、購入のためかなりの田畑の売却と回収不能による莫大な損失
- 海難事故
- 本隆寺建立のための多額の寄付
- 親戚の者の負債の肩代わり　　等

五代七造は莫大な財産の整理などを済ませ、東京の二男の邸へ、新築した自邸へ

明治 41 年 10 月 14 日死去　　享年 64 歳

中瀬家先祖の墓所は、高岡市の大法寺にある。

石見外浦の「客船帳」には船 11 艘所有

明治 19・22 年に所有船で、樺太、カムチヤッカ、中国東北部で漁業調査を行い、鮭・鱒操業し、満載して帰国、その後、伏木の竹内弥八郎、放生津の米田六四郎、海老江の竹内公正らが相次いで北洋へ、日露戦争（明 37～38 年）後、北洋漁業が本格化

放生津古地名

放生津に関わる古地名調査メモ

町名の由来

発行・作成／2023年(令和5年)01月15日（改訂版 06）

編集･作成／桧物和広　　Kazuhiro　Himono

email: himokazu@nifty.com

〒 934-0013　　富山県射水市立町 12-5 ／ TEL0766-84-8150